

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(2)



中村周平

今回も、事故に遭うまでの私の過去について触れていきたいと思います。高校でもラグビーを続けたという気持ちをもちながら、将来の進路も考え進学した京都成章高校。しかし、「部活と勉強の両立」は自分が想像していた以上に厳しいものであることを痛感していきます。前回に引き続き、研究仲間の北村さんに協力していただいた、「私へのインタビュー」で交わされた会話の内容を手がかりに私の心境を書き出していきたいと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュアー)=Iとする。

3 悩んだ末の進路選択

「これからもラグビーを続けていきたい、でも自分のラグビーに全く自信がもてない」。一人で考えていても良い結論が出るはずありませんでした。「高校でもラグビーを続けて大丈夫だろうか…自分の正直な気持ちを監督に相談してみようかな」。厳しいことを言われるのは、ある程度覚悟していました。

S:「あと自分の中でラグビー続けたいなっていう気持ちがあったので、その時に監督に相談してみたら、『お前でも高校までやったらラグビー続けられるやろ』。その時、体ちっちゃかったんですけど、たぶん160cmぐらいしかなくて」

I:「そうなんや」

監督からの答えは意外なものでした。そして、その日を境に、私の「ラグビー熱」はさらに高まっていきました。進路を考える上で、それまでまったく入っていなかった「ラグビーができる高校」という選択肢が増えたのです。

また、その頃、漠然とはしていたのですが、将来福祉の道に進みたいという思いを持っていました。

S:「悩んだんですけど。高校の進路も最初は地元の公立高校に進むつもりでいたし、どうしようかっていう…あと福祉の勉強もしたかったんで、高校の時に」

I:「なんで福祉の勉強がしたかったん？」

S:「あの、ちょっと話が変わっちゃうんですけど、中2の時にばあちゃんが死んだんですね。(中略)母方のおばあちゃんはもともと石川の人で、じいちゃんとお阪に40年住んでいたんですけど、結局死んだのって、病院やったんですね。ベットの上で。何回かお見舞いにいったんですけど、病院ってすごい自分の中で、こう、時間は管理されてるし、自分のしたいことはできひんし、そんな場所が終の棲家になってしまうことが、中学生ながらにすごくショッキングで。ばあちゃんがそこで死んだっていうのがすごい自分の中で感じた時に、もし自分が死ぬ場所が病院だったらイヤだな、どうせならできる限り自分の住みなれたところとか、自分の生まれてきたところの近くで人生終わりたいよなって、なれたらいいよなって。めっちゃ簡単なんですけど、その時に深く考えたことなかったんですけど、その時にそうしようと思ったら今何があるんかなって思ったときに、ちょうどそのころ介護保険が始まったところで、何かニュースとかでもグループホームの話とかでてきた時で。こんな1人では難しいかもしれんけど、できたら自分の死にたいところで死ねるんちゃうかなとか思って。逆にそういう人のお手伝いとかできるんちゃうかなって思って。で福祉勉強してみたいなと思ったのがちょうど中学校卒業のころ」

祖母という、親しい人間の死に初めて直面したことは、私に大きな影響を与えていました。知らない土地、知らない病院で息を引き取ることとなった祖母を不憫に思いながら、「できることなら自分の住み慣れた地域で終われたらいいのに」と感じていました。そのためには何が必要なのか。子ども心に「グループホーム」というものがあり、それは「福祉」という分野であるということを知りました。「高校で将来の進路を決めるのもいいけど、大学からでも遅くないのでは」という周囲のアドバイスもあり、京都府下の公立高校の福祉科への進学は断念したものの「福祉はしっかり勉強したい。でも、ラグビーも続けたい。じゃあ、ラグビーをしながら大学への進学も考えられる高校を探さなきゃ」と考えるようになっていきました。

そして、悩んだ末に中学からお世話になっていた「京都成章高校」に進学することを決めました。

S:「その福祉のことを捨てたくなかった、というか考えたかったので。ほな大学のことも視野に入れながら、ラグビーも続けられて、できれば近いところがいいよねっていうことで、いろんな選択肢を足していったところ、近くに成章高校があって。中学校のころから何回かお世話になっていた高校でもあったので、ほな、そこ行ってみようかっていう」

中学時代の監督と、京都成章高校の監督とはつながりがあるようで、毎年夏ごろには、京都成章の高校生に混じって練習していた「縁」のある高校でした。また、その当時から、精神論ではなく「メンタルトレーニング」「体の軸を作るセンタリング」など科学的なトレーニングを取り入れていました。

S:「僕がラグビー続けたくなくなったもう一つのきっかけっていうのが、あの僕らの3つ上の代になるんですかね、3つ上の代の、そのとき京都代表やった伏見工業高校が、全国制覇したんですね。(中略)その時の決勝戦のスコアが、確か21対7で相手佐賀工だったんですけど。その時の京都府の全国大会予選で、成章と伏工が決勝であたったんですけど、15対0なんですよ。このスコアを見た時に、トライは一本もとれへんかったけど、全国大会の決勝に上がってきた佐賀工よりも伏見をロースコアで抑えてる。実際にそのビデオも見て、すごい展開の速いラグビーを見て、中学校から通ってる時も、その監督が科学的なラグビーを教えてはったんですよ。勝利の方程式じゃないですけど、野村監督みたいに、根性論一辺倒に感じられがちなラグビーの中で、そんな科学的な指導があるのかなって。もしかしたら、自分に合ってるんじゃないのかなって思って、そんないろんなことが重なって成章高校に行こうと思った」

I:「なるほどそっかそっか。それもある意味運ばれて行っていると言えば、運ばれていったわけやね、成章高校に」

S:「はい」

「体が小さい僕でも、大きい選手と戦えるんじゃないか、中学時代に感じていた不安や劣等感を、頑張っていけば払拭していけるのではないか」。京都成章高校の「科学的な指導」に大きな期待を寄せていました。

4 入学後の違和感

ラグビーに、将来に、様々な希望や期待を持ちながら京都成章高校に進学しました。最初は慣れない高校生活の緊張感と余裕のない毎日で気付かなかったのですが、徐々にこの高校の現状に体がついていなくなっていくます。

I:「高校1年の自分の成章高校でのクラブ生活、というものを中村君が総括したらどんな感じ?高校1年生はどういう年やったん?」

S:「高校1年生の時は、まず(ラグビー部に)入って自分が思い描いてたラグビーとちょっと違うなあって」

I:「そうなんや?」

S:「はい。その科学的な…というのを売りにしてはったので、そういう練習が待ってるんかなと思ったんですけど」

I:「根性根性ではないみたいなの?」

S:「僕ら二つ上の代が初めて花園に出たんですけど、それまでに春の大会で伏見に勝ったっていうのが一つあって。ただ、伏見工業高校は春負けても、必ず夏の合宿で鍛え上げて、冬には勝ってくるっていう鉄則がここ何年かあって。(中略)実際に、成章高校も、その先輩ら(初めて花園に出た)が出る何年か前にも伏工に勝ってる時があったんですね。でも、結局秋にひっくり返されて全国に出れなかったっていう苦い思い出があったみたいで。春勝った後に、監督もその時は気を引き締めていろいろ考えはったとは思いますが、練習がどんどんどんどん、ハード化していったというか。最初の方はすごい科学的なことってはったのに、どんどんどんどん、練習が根性的にというか…。それまで週に一回あったオフも、ミーティングやってことで無くなってしまったりとか」

(中略)

I: 「なるほど、せやけど自分が入っていったら成章のクラブの方向性みたいなものも変わってきた？」

S: 「と思うんですよね。(監督が)すごい焦ってはるなあというか…」

科学的な練習を謳っていたラグビーは少しずつ、精神論で乗りきろうとする「古き良きラグビー」と代わり映えのないものになり、休みも少なくストレスの溜まる時期が続きました。「絶対に全国大会に出なければ」という部活内に漂う雰囲気が大きく影響していたように思います。

それに並行して、それまでなんとか凌いできた勉強も、部活がハードになるに連れついていけなくなり、授業に支障をきたすようになりました。

S: 「実は話がもう一つあって…ラグビーの方では様子が違うなって思い始めたのと、あと勉強の方ですね。(中略)もし、成章高校でラグビーしようと思ったら、予備校に通いながらラグビーするようなものやという事は親からも聞かされてて。やっぱり進学校を売りにしている部分があったので」

I: 「遅うまで電気付いてるしね。9時とかね」

S: 「それでもラグビーやりたかったし、勉強も手抜きがなくなかったから、大丈夫って言って行ったんですけど」

I: 「結構勉強が大変やったわけや？」

S: 「勉強が大変で…しかも一番辛かったのが、テストで合格点を取らないと部活に行かせてもらえない。(中略)勉強せな部活行けへん。でも、勉強し続けたら部活の時間無くなるし。部活頑張ってたら勉強できひん、平均点取れへんみたいな…。途中で勉強と部活の両立ができなくなって、一時期高校行けなくなったときがあったんですよ。そんな長い時間じゃなかったですけど」

I: 「登校を拒否ってしまってたわけ？」

S: 「教科の授業出たら耐えられへんようになってしまった。部活も自分が思い描いていたものとは違ったので、ちょっとしんどかったのと、勉強は勉強でキツすぎて…これはちょっとついて行けへんってことで、勉強もラグビーも自分の中でしんどくなり

かけてたのが高校1年でした」

「予習を怠れば部活に行かせてもらえない」、そんな不安にいつも悩まされていた高校生活でした。入る前に思い描いていた「部活と勉強の両立」に失敗し、現実から逃げるために学校に行けない日も。今考えれば「自分が行くと言い出しておきながら」という己の弱さが許せなかったのかも知れません。

一度はラグビー部を辞めることも考えました。そうすれば全てが楽になると思ったからです。

I: 「でも、クラブは辞めようと思わへんかったんや？」

S: 「高1のとき、1回思いました」

I: 「どんな？学校行けへんかった時？」

S: 「学校行けへんかったときですね。これは何かを捨てなもうあかんと思ったんで。高校やめなアカンと思ったぐらいやったんで。秋ですかね、たぶん11月くらいにちょっとこれは無理かなと思って、成績も落ち始めてたので。そう、辞めようと思ったのは秋ですね」

I: 「まあせやけど、またなんとか思い直して学校にも通い、なんとか高校1年も終わったって感じ？」

S: 「そうですね。3学期に三者面談があって、そのとき英語の先生が担任やったんですよ。(中略)その先生が、『成績が落ち始めている』『このままいくとヤバイ』という話をされて、で『勉強かなんかで悩んでるんちゃうか』と知ったはったみたいで、『人間何でもできひんから、とりあえず一個捨てろ』と言わはって、しんどくなってるのを…。そうじゃないと、いろんなことが全部ダメになってしまうからって言われて、でその先生に全部中身は伝えられなかったんですけど、心の中で『あっ英語捨てよ』と思って」

I: 「ハッハッハッハ (笑)」

S: 「これが捨てられたら楽になる」

I: 「そいつはクラブを捨てると」

S: 「クラブか別の教科かなんか分からないですけど」

I: 「君の中では英語捨てたると」

S: 「変な話なんですけど、今まで友だちのノートとかまったく見たことなかったんですけど、英語は割り切って友だちがやってたやつをそのまま写させてもらって、それでなんとか乗り切ってたですね。自分

でわかるところはやってたんですけど、時間的にどうしても追いつかなくて、友だちに見せてもらえるところは…。それでちょっと気持ちが盛り返しましたね」

ちょうどその頃、進路についての三者面談をおこなっていました。勉強不足はすぐに成績の悪化につながり、そのことを心配した担任が、今抱えている悩みを整理していくことを助言してくれました。「あっ、頑張り過ぎ無くてもいいんや」と少し気持ちが楽になっていきました。

5 掴みかけた自分のペース

その後も、部活と勉強との両立が上手くいかない日々が続きました。1年生の終わり頃、練習中に負傷した膝が悪化、手術を余儀なくされました。部活もしばらく休むことになったのですが、それが偶然にも、張り詰めて今にも破裂しそうだった私の精神面に、大事な時間を与えてくれることとなったのです。気持ちの整理もでき、心に少し余裕も生まれ始めました。また、もう一つ私を追い込む原因になっていた、普段の勉強時間の不足も、友人の協力を得て少しずつ打開策を見出していけるようになります。

S:「1年の終わりごろに膝の怪我して、左膝を手術したんですね。先輩らが引退されてからやったから…2, 3, 4月と休んでたんですね。その間は部活もそんなにしんどくなかったし、その間に勉強も…英語も捨てたので他の教科が集中できるようになって。復帰したのが5月の合宿のときで、それまでラグビーしんどかったのも、なんとか勉強の方でついていけるようになった。あと、自分の中で気持ちの切り替えができるようにもなりましたね。家に帰ったらスイッチがOFFになって寝てしまうっていうことがずっとあって。これは家に帰ったら寝だけの生活になってしまうから、とりあえず学校にいる間の集中力を活かそうと。部活が8時に終わって、そこから筋トレして9時過ぎ、10時くらいから部活やってないメンバーが勉強会してるんで…(中略)だから、友だちとそこから1時間くらい勉強付き合ってたって言っ

て(学校に)残るようになったんですね。そのとき明日の単語テストの勉強とか、絶対覚えなアカン暗記もんとかをお互いに問題出し合ったりして、それがちょっとずつ効果出だしてましたね、高2の中頃になってきたときに」

I:「ということは、高校1年の時はある程度学校で仕組みられた形の中に自分が入って、結構しんどいなみたいな状況やったんやけど、高校2年になると自分なりに自分の生活のリズムみたいなものを、あるいは自分の居場所というか…そういうものを自分なりに工夫して、自分なりの生活リズムというか、より快適なものを作っていこうっていう…ほなそういう意味では結構充実してたわけや？」

S:「そうですね、一番あの頃が高校の中でなんとなく自分でもペースに乗ってきたかなと思ってましたね」

I:「なるほど。クラブの方は高校1年の時にだんだん根性の方でずっといってて、それは高校2年になってもそうなの？」

S:「その体制自体は、高校2年になっても変わらなかったですね。それに自分が慣れてきてた部分もありましたけど。うまいこと怒られんようには…」

I:「手え抜くところでは手え抜いて。そういうことも2年になってきたら分かるようになったわけや」

最初は、「睡眠時間がさらに削られるだけでは」と思うこともあったのですが、予習した日の授業の理解度や小テストでの平均点が上がるなど、その効果は少しずつ表れ始めます。2年生の秋頃には、自分なりの高校生活のリズムを掴み出していました。「これなら、なんとか乗り切れる」、そのようなことを感じ始めていました。